CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 18

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）

報告____　会員の活動　植物園でコンポスト in New York　他　p1
CVI:環境保全ボランティアリーダー研修プログラム　p5
連載____　ボランティアリーダーについて思うこと　New　p6
事故事例コラム、キーワード
お知らせ　p8

報告　会員の活動報告

はじめに

朝廣和夫　（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN 理事長）

暮秋の候、みなさま、いかがお過ごしでしょうか。今年の 2018 年は、またしても災害の多い年でした。震災について、4 月 9 日は島根県西部地震、6 月 18 日の大阪府北部地震、9 月 6 日の北海道胆振東部地震に各地で襲われました。豪雨については 6 月 28 日から 7 月 8 日にかけて西日本から北海道まで平成 30 年 7 月豪雨に見舞われています。台風も 6 月末の 7 号から 9 月末の 24 号まで、5 つ近く上陸し、7 月末頃の 12 号などは、見たこともない本州から九州に西走する逆走台風でした。また、7～9 月の猛暑は災害とも呼ばれ、多くの地域の催しが中止になっています。

「異常気象」という言葉が使用され久しいですが、2018 年 10 月 8 日、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、特別報告書『1.5℃の地球温暖化』を承認しました。この報告書のメッセージは、私たちは既に、異常気象の頻発、海水面の上昇、北極海氷の後退といった変化を通じ、1℃という地球温暖化の影響を目の当たりにしていると指摘されています。IPCC は、1.5℃に抑える必要性を指摘しており、あまり時間はなく、早急な対策を求めています。

「Think globally, act locally」に基づけば、私は、地域での活動を、グローバルに取り組む時ではないかと感じています。地域のない国はないわけで、国家を超えて、地域と地域の人々の連帯が、求められる時代だと思います。

本号は、JCVN の会員の取り組みにスポットをあて、私たちの現場の取り組みを皆様と共有することとしました。また、新連載として、ＮＰＯ法人よこはま里山研究所ＮＯＲＡの吉武美保子さんにご寄稿をいただきました。

今後とも、よろしくお願いいたします。

■植物園でコンポスト in New York

平 由以子（JCVN 理事／特定非営利活動法人循環生活研究所理事長）

わたしたち NPO は、安全な野菜があたりまえに毎日の食卓にのぼる社会の実現を目標に活動 22 年目に入ります。身近な有機性廃棄物（生ごみ、雑草、落ち葉、海藻、松葉など）の堆肥づくりを柱として、たのしい循環生活をもっと気軽に参加してもらうために、ローカルフードサイクリング事業を立ち上げました。そのために、この 4 年アメリカへ視察訪問の 1 例をご紹介いたします。

ニューヨークの人口は約 825 万人。市には埋め立て処分場や焼却施設が一つもないため、全てのごみは他州に持ち込まれています。生ごみの循環活動がマンハッタンを中心に始まっています。2030 年までにゼロウエイスト政策で市の３５％を占める生ごみをはじめとする有機ごみのリサイクルに力を入れており、そのひとつとして NYC Compost Project があります。委託先のひとつであるブルックリン植物園は、いくつかの他の都市農場やコミュニティ緑化プロジェクトをもっており、そのひとつである事業「ニューヨーク市住宅局 Farm」のレッドフック公営住宅（6300 人居住）に隣接した NYCHA 所有地にあるコミュニティガーデンを訪問。住民が関わり交流する場として位置づけられている。非営利団体 Added Value Farms がこの地域のパートナー団体として、ファームの運営を協働で担っている。2013 年にできた最初の都市農園。この日ボランテイアプログラムに参加者は子どもから大人まで約 20 人。資金調達をしている中間支援組織の参加者も多く、結びつきの強さを感じた。スタッフは若者雇用訓練プログラム生も数人おり、適切な役割分担、道具や準備も含め、きちんと推進され活気もあった。

グリーン・シティ・フォースは、環境に関する全国的なサービスの低所得層の若者を巻き込んだアメリコープス・プログラムです。公営住宅にするお年寄り向けヨガ教室を実施し、ファームで取れた野菜を参加者に無料配布していた。基本的に、公営住宅の住民は、ファームでボランティア活動をするか、または生ごみを持参すれば、ファームで収穫した野菜を無料でもらえるしくみになっている。

歩いて 5 分のところに年間 225 トンを超えるたい肥を製造するアメリカで最大のコミュニティコンポストサイトがある。地域の住民は、そこに毎週土曜日、またはボランティア作業日に、家庭ででた果実、野菜、コーヒー粉くずを持ち込みできる。さらにドロップオフ・サイトから収集された生ごみが追加されています。ここでは年間 2000 人近くのボランティアが作業を手伝っている。施設全体が、整理され、ボランティアが無理な力を使うことなく作業できるように工夫が

なされている。（道具の置き方、太いタイヤの 2 輪車、冬は作業用手袋を温めるなど）また、太陽光、風力、若者、地域の人などさまざまな資源を活用し、地域に健康と環境を提供している。隣接する農園の面積は 3366 坪。堆肥 100％で育てた野菜は年間 20,000 パウンド＝9060kg を収穫、毎週土曜日にこの農園で、毎週水曜日にレッドフックコミュニティセンター前で販売している。

■平成29年7月九州北部豪雨での取り組み

朝廣和夫　（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN理事長）

気象観測史上でも最大級の集中豪雨

2017 年 7 月 5 日から 6 日にかけて、福岡県南部と大分県北西部は未曽有の豪雨に見舞われました。平成 29 年 7 月九州北部豪雨です。本誌面では、昨年発行した vol.16 号で詳細をお伝えしました。

この災害の特徴は、同じ場所で長時間猛烈な雨が降り続いたことです。特に、福岡県朝倉市付近

では3時間で約400mm、12時間で約900mmの雨量が解析され、気象観測史上でも最大級の集中豪雨となりました。花崗岩地帯では谷という谷で土砂崩壊が生じ、下流の集落は水、土砂、流木に襲われました。スギ・ヒノキの収穫の進まない近年の山の環境で、このような災害が派生すると大きな被害を伴います。

農地等復旧ボランティアの一般化

JCVNが関わってきた環境保全ボランティアの流れでは、本災害で農業支援・農地等復旧ボランティア活動の展開が複数の団体により広く行われたことは、大きな転機とみています。NPO法人山村塾の支援により福岡県朝倉市における黒川復興プロジェクトが立ち上がり、東峰村での展開。大分県日田市のひちくボランティアセンターでも展開されました。県外の団体も含め、多数の活動が展開されました。特筆すべきは、福岡県が2017年9月の補正予算で農林漁業再生ボランティア活動支援事業を計上し、これを受ける形で、2017年11月3日にJA筑前あさくら農業ボランティアセンターが設置され、農ボラの実施に加え、

黒川復興プロジェクト　稲刈り支援

農ボラ活動団体による農地支援者情報共有会議

定期的に農ボラ活動団体による農地支援者情報共有会議が行われました。全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）が調整をサポートし、農ボラにおける、これらの動きは、全国に例のない展開です。

私は2017年9月に学生たちと被災した田んぼの流入したごみの除去や手刈りによる稲刈り支援を行いました。しかしながら、別件で腰痛を発症し、ままならぬ半年を送ることとなりました。

海外の大学との共同による復興提案

2018年度は腰痛も和らぎ、福岡県朝倉市松末小学校周辺を対象とし、建築やランドスケープデザインを学ぶ環境設計学科4年生の演習として、復興の将来像を考える活動を行いました。7月末には香港高等教育科学学院の緑地景観デザインの教員と学生13名が加わり、現地視察を行い、数日、議論と計画提案の図面作成を行いました。

被災地は大変、深刻な状況であり、こういった活動へのご批判もありました。しかしながら、将来を見据えた時、実施する意義を見出すことが

学生達との視察、設計演習風景

できます。1つは、日々の避難生活と家屋・農地の復旧に汗をされている地域の方々に、将来を担う若者からの復興のアイデアを届けること。2つ目は、将来学生は類似の災害に遭遇する可能性が高いため、現実問題として学びを深めること。そして、海外でも災害が頻発しており、国を超えて相互に災害復興、事前の備え、自然や災害と共に生きる暮らし方を考えることが大切だからです。

今後、成果を被災地の方々にお伝えし、次なる展開を模索したいと考えています。

ボランティアも大学の演習も、多数の海外の若者と共同する場となっています。この厳しい現実の先に、新たな連帯による社会形成が着実に進んでいると感じます。

■芸農ワークキャンプ

小森　耕太　（JCVN副理事長、NPO法人山村塾事務局長）

8月24日から9月20日の4週間、えがおの森（福岡県八女市黒木町）にて、山村塾と九州大学ソーシャルアートラボとの連携によって、「奥八女芸農ワークキャンプ」を開催しました。ワークキャンプには、アーティストの武田力さん（演出家、民俗芸能アーカイバー）と国際ボランティア3名（香港2名、ロシア1名）が参加し、寝食を共にしながら、半分の時間を農作業（棚田の保全）、もう半分の時間をアートプロジェクト（笠原の民俗芸能を考える）に取り組みました。

山村塾がはじめて合宿ボランティアを行ったのは、1997年の「日英合同里山・田園保全ワーキングホリデー（10日間）」。2007年からは、NPO法人日本国際ワークキャンプセンター（NICE）との共催により、国際ワークキャンプ「里山80日ボランティア」を実施してきました。最初は物珍しかった国際ボランティアも、今ではすっかり地域に馴染み、外国人が棚田で作業していても、地域を散歩していても、だれも驚かなくなってきました。外国人が農山村に滞在し、棚田や森林の手入れを行うボランティアとして活動することは、受け入れ側である私たちが、その仕事の意味を丁寧に考え、正しく伝える機会を作り出してくれます。多様な年代や性、居住地の人たちが交わることで、お互いを理解し、尊重しあうことにつながり、本当に大切なものが何なのか気づかせてくれるように思います。

今回の「奥八女芸農ワークキャンプ」に参加したアーティストの武田力さんは、地域に入り込み、そこで暮らす人々やボランティアメンバーと対話をしながら作品をつくる作風でした。そのこともあり、ボランティアだけが地域に入ったときよりも、さらに踏み込んだ感覚で地域とコミュニケーションをとることができました。また、ボランティアの疑問や意見に耳を傾け、アイデアを取り入れながら進めていく手法は、ボランティアの参加意欲を高め、作業や生活、コミュニケーションの質を高めてくれたように感じます。

ボランティアリーダーには様々なキャラクターがあってよいと思うのですが、経験の少ないリーダーはバランスをとることを意識しすぎてしまい、地域やボランティア、プロジェクトに対して受け身になってしまう傾向が強いと感じていました。アーティストも様々な人がいますので、だれでもOKとはいかないとは思いますが、アーティストの持つ、自己表現力や観察力、主体性やコミュニケーションの取り方は、環境保全や地域でのボランティア活動に大きな気づきやヒントを与えてくれると感じました。アート×農×ボランティア×〇〇〇・・・と、あと数年間は試行を繰り返しながら、次の展開を考えていきたいと思います。また報告させていただきます。

（参考）九州大学ソーシャルアートラボ実践講座シリーズ「アートと社会包摂」
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/180829-0916okuyame.html

写真1：耕作が困難になった棚田の草刈り作業。

写真2：伐採現場にて新しい伝統芸能を考える武田力さんとボランティア

環境保全活動
リーダー研修
CVI 2018
Conservation Volunteer Institute

CVI：環境保全活動リーダー研修報告（前半・後半）

■共通コース（前期）報告

昨年、2017 年から開始した環境保全活動リーダー研修（Conservation Volunteer Institute, 以下、CVI という）を今年度も実施しました。共通コースを前４回、下記の 6 月 21 日～8 月 23 日 18 時～21 時というスケジュールです。

内容は前年度と同様とし、リーダーの役割、コミュニケーション、安全管理・概論、リスクアセスメントの４テーマです。今後も毎年同じ内容を実施する予定です。理由の一つは、JCVN としてパッケージングをしていることと、学校やお仕事の都合で参加できなかった場合は、次年度、同じ内容を受講できるようにするためです。本当は、年度中に複数回できると良いのですが、講師の人数に限りがあり、参加者数も少数精鋭のため、年１回で実施しております。

◆共通コース 前期 全４回

第１回	6/21（木） 18：30～21：00	第２回	7/11（水） 18：30～21：00
リーダーの役割 なぜボランティアが必要か、モチベーション、リーダーの役割、リーダーシップ		コミュニケーション コミュニケーション、プレゼンテーション、フィードバック	
第３回	8/2（木） 18：30～21：00	第４回	8/23（木） 18：30～21：00
安全管理・概論 安全管理概論、事故事例分析		リスクアセスメント リスクアセスメント理論と実習	

さて、研修の修了生は、写真の中の約 7 名でした。JCVN の講座は体験型で実施するので、この程度の人数であると受講生の充実感が増すので効果的と考えています。

今回、印象深かったのは、やはり、安全管理関連です。次ページに志賀氏の新連載、「事故事例コラム」を執筆いただいている内容で、事例に学び、対応を考えるという姿勢を学びました。

■共通コース（後期）報告

さて、2018 年度は、CVI 初の共通コース後期を下記のように実施しました。

■と　き：10 月 7 日（日）9:30～16:30
■ところ：コミセンわじろ　２Ｆ　和室
■内　容：里山保全概論、活動計画、
　　チームビルディング、
　　課題解決、地域の巻き込み方

前期との違いは、朝から夕方の１日プログラムとなっており、約５つの内容を、休憩をはさみながら進めていく集中型としています。受講生は、前期を受けなければ受講できないということはなく、後期を受講して前期を、という方も OK としています。

会場は、「畳」。膝を突き合わせて、時には議論し、時にはゲームをして理論と実践を行き来します。受講生の意気込みは、「より事例を学びたい、自分を動かすヒントを持ち帰りたい、新しいを知りたい、ボランティアの幅を広げたい」ということでした。多くの学びが得られたと思います。共通コースを終えられた方は、今後、インターンや専門とフェーズとなります。

連載記事

■９月の森、横浜から

吉武　美保子　（ＮＰＯ法人よこはま里山研究所ＮＯＲＡ）

大きな台風が二度も日本列島を直撃、甚大な被害を各地にもたらしました。被害に遭われた方には心からお見舞い申し上げます。最近あまり森の被害を聞いていなかった横浜ですが、台風二四号は木々をなぎ倒していきました。二十数年前、森づくりボランティア活動が行政との関係が深くなり始めた頃、相次いで大きな台風があり、スギ林がひどく倒れました。チェーンソーを持ったボランティアの方々があちこちで活躍するきっかけとなったのです。

近年、森づくりボランティア活動は誰でも参加できる身近な取り組みとなり、森の手入れも昔よりはすすんでいます。しかし、活動者の高齢化や気軽に動力機器に頼る雰囲気もあり、安全管理の内容は単に伐倒の技術的なものだけでは済まなくなってきています。

横浜市ではボランティア向けに安全管理や動植物観察等、多くの講座を行っていますが、インタープリター養成の講座が五年前に始まりました。森の魅力を発信するのも「森づくり」というコンセプトですが、それは、各団体の中で多角的な視点で森を見られるようになること、人にも森にもやさしい活動をすすめられるようになる、という期待も秘かに込めています。

台風の過ぎ去った近くの森では、散策路への倒木や落枝をボランティアの機動力で行政の巡回が入る前に片づけていました。やっぱりすごいなあ～、と感嘆。

■事故事例コラム（１）

志賀　壮史（JCVN 理事、NPO 法人グリーンシティ福岡理事）

ボランティア団体などの安全管理のために「事故事例」の収集と研究をお勧めしています。いろんなところで何度も「気になった事故事例は新聞の切り抜きやネットニュースのコピペなどを残し、時々語り合いましょう。」という提案です。

今回から連載コラムとして NPO 法人グリーンシティ福岡で集めた事故事例をまとめてご紹介していきます。あくまでグリーンシティの視点なので、環境ボランティアに関する事故を網羅しているわけではなく、福岡や九州が多くなるのはご了承ください。平成 30 年 5～8 月に収集した事故事例を以下に挙げます。日付は発生した（と考えられる）月日です。

＊　＊　＊　＊　＊

5/6 父子の山岳遭難、遺体で発見

新潟県阿賀野市の五頭連山で 30 代父親と小学一年の息子が道に迷って一夜ビバークした後、朝に「これから下山する」と連絡して行方不明。5/29 に遺体で発見された。低体温症。

6/7 マダニ感染症で死亡

熊本県が 7 日、マダニが媒介する SFTS に感染した 80 代女性が死亡 (6/2) したと発表した。病院受診の数日前に山林作業をしていた。

6/26 格子板が倒れ男性軽症

福岡市役所西側ふれあい広場で、植え込みに設置されていた木製の格子板 2 基が強風で倒れ、歩いていた 40 代男性が軽いけがをした。

7/17 熱射病で豊田の小 1 死亡

愛知県豊田市の小学校の教室で小学一年生の男子児童が倒れ、約 1 時間後に死亡した。公園に行く校外活動の後に容体が悪化した。

7/21 油山で 90 歳男性遭難

福岡市の油山で 90 歳男性が「油山にいる」との連絡の後、行方がわからなくなり、27 日に遺体で発見された。

7/22 シュノーケル手伝い中死亡

福岡県新宮町の沖合で 30 代男性が発見されたが、その後、死亡が確認された。男性は「地域おこし協力隊」の隊員に委嘱されていた。

8/23 海岸で大学生 3 人が行方不明

静岡市の海岸で大学生 3 人が行方不明。25 日に 1 人の遺体が発見。台風 20 号による高波にさらわれたとみられる。

8/26 ロードレース大会 61 人がハチに刺される

長野県松本市で自転車のロードレースの大会中に 61 人がスズメバチに刺されたが全員、軽症。ガードレールの支柱にハチの巣があった。

＊　＊　＊　＊　＊

7/17 豊田市の熱中症事例は痛ましいものでした。今年は猛暑が何度もニュースになりました。

この新聞記事を読んだ方たちと意見交換すると「現在の大人が子どもの頃に比べて街中の温度が上がってきてる可能性がある。」「寝不足だったり、朝の水分補給が足りていないことも想定した方がよい。」「台風が続いたため、校外学習などの行事を延期 or 中止しにくくて決行したのかもしれない。」といった意見や推測が聞かれました。

1 人あたり 30～40 人の児童を見守る必要がある学校の先生方は、通常でもかなりの苦労だと思います。さらに加えて熱中症、中でも特に重篤な熱射病について十分な知識や目配りの余裕があったかどうかわかりません。この場合、少しでも早く体温を下げる処置が必要となりますが、自分が同じ立場だったとしたら、気づいてあげることができただろうか？どう行動するのがよいだろうか？と考えさせられる事例でした。今後、夏の時期は、これまで以上の熱中症の対策・対応が必要になってくるでしょう。

＊　＊　＊　＊　＊

起こしたくない事故ですが、起きてしまった事故は今後の改善点を教えてくれます。事故事例の収集と研究は「過ちから学ぶこと」と言えます。ぜひご自身の団体や組織でも取り組んでください。

■キーワード：ソーシャリー　エンゲイジド　アート

朝廣和夫　（九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門、JCVN理事長）

社会の課題にコミットするアート

本紙面、小森氏より「農＋アート」の取組を紹介いただきました。この取り組みは九州大学ソーシャルアートラボ [1]との共同で、ここで少し、私たちの言う「ソーシャルアート」の語について、もう少し深めたいと思います。この語は、既に広く利用されており、実践されている方も多数おられます。「アートで社会を変える」などのキャッチで、本も複数出版されています。海外では、“Socially engaged art”とも呼ばれ、人々の参加型のアート実践は、どちらかというと作品そのものに加え、関係性が重要視されます。

九大では平成 27 年に組織を設置する際に、「社会的課題に対して、アートを用いて解決へと導く方法に関する研究・教育・実践・提言を、学際的共同作業を通じて行おう」、すなわち「社会の課題にコミットするアート」という視点で作られた造語です。

里地・里山の価値を発掘し伝える

里地・里山の保全を

都市に住む人々とどう進めるか。故重松敏則教授は、レクリエーションとしての里地・里山ボランティアを実装されてきました。しかしながら、今一つ、その自然と活動の価値が伝わらない。晩年は、「里山賛歌」を自ら作詞・作曲され、「心に直接、うったえかけるんや」と、芸術による展開を模索されています。「農＋アート」の取組は、私達の新しいチャレンジです。ソーシャルアートラボは、今年、「ソーシャルアートラボ　地域と社会をひらく」という本を出版しました。小森氏と私も執筆していますので、是非、お手元においていただきたい一冊です。

1) http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●祝！　アジア景観デザイン学会「２０１８　景観研究賞」受賞

2018 年 11 月 2 日、九州大学伊都キャンパスで行われたアジア景観デザイン学会で、「2018 景観研究賞」を、「平成 24 年九州北部豪雨後の中山間地景観の被災分布と特徴」の研究・活動に対し、JCVN 理事長の朝廣和夫が受賞いたしましたので報告いたします。

この受賞は、NPO 法人山村塾をはじめとする、農業ボランティア団体、ボランティアの皆様方、八女市、福岡県など、近年の災害に対する中山間地支援の活動の成果があってのことです。

特に、JCVN にとっては、1997 年ごろから、山村塾と故重松敏則理事長が進めてきた BTCV（英国環境保全ボランティアトラスト）と開始した里山田園保全ワーキングホリデーの取組にはじまり、棚田の修復や、林内での散策路づくりなどで、環境保全ボランティアの輪を育み、人材育成の場をつくりました。農ボラの展開には、そのノウハウが少なからず貢献しています。平時の環境保全活動と、災害時のボランティアはコインの裏表であり、今回いただいた社会的評価を糧に、展開が期待されます。

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。

JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。

活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

・個人正会員（¥10,000／年）
・個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
・団体正会員（¥20,000／年）
・団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

［会費・寄付振込口座］

番号：０１７６０－９－１２２４０７

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS　１８
■発行日：平成３０年１１月１５日
■発行頻度：年3回
■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）
■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org